

第20号様式記載の手引

1 この申告書の用途等

- (1) この申告書は、仮決算に基づく中間申告（連結法人以外の法人が行う中間申告に限ります。）、確定した決算に基づく確定申告及びこれらに係る修正申告をする場合に使用します。
- (2) この申告書は、事務所又は事業所（以下「事務所等」といいます。）所在地の市町村長に1通を提出してください。

2 各欄の記載のしかた

欄	記載のしかた	留意事項
1 「※処理事項」		記載する必要はありません。
2 金額の単位区分（けた）のある欄	単位区分に従って正確に記載してください。また記載すべき金額が赤字額となるときは、その金額の直前の単位（けた）に△印を付してください。	
3 「法人名」	法人課税信託の受託者が当該法人課税信託について、この申告書を提出する場合にあっては、当該法人課税信託の名称を併記してください。	
4 「所在地」	本店の所在地を記載してください。なお、2以上の市町村に事務所等を有する法人が、当該市町村内に支店等のみを有する場合は、主たる支店等の所在地も併記してください。	
5 「この申告の基礎」	法人税に係る修正申告、更正、決定又は再更正を基礎にして修正申告をする場合は、法人税に係る修正申告書を提出し、又は更正、決定若しくは再更正を受けた年月日（当該法人が連結子法人である場合又は連結子法人であった場合にあっては、当該法人との間に連結完全支配関係がある連結親法人若しくは連結完全支配関係があった連結親法人が法人税に係る修正申告書を提出し、又は更正、決定若しくは再更正を受けた年月日）を記載してください。	
6 「事業種目」	事業の種類を具体的に、例えば「電気器具製造業」と記載します。なお、2以上の事業を行う場合にはそれぞれの事業を記載し、主たる事業に○印を付してください。	
7 「期末現在の資本金の額又は出資金の額」及び「期末現在の資本金等の額又は連結個別資本金等の額」	期末（中間申告の場合にあっては、その計算期間の末日）現在における資本金の額又は出資金の額、法人税法第2条第16号に規定する資本金等の額又は同条第17号の2に規定する連結個別資本金等の額（保険業法に規定する相互会社にあつては、純資産額）をそれぞれの欄に記載します。	
8 「市町村民税の申告書」	空欄は、次のように記載します。 (1) 法人税の中間申告書に係る申告の場合は、「中間」 (2) 法人税の確定申告書（退職年金等積立金に係るものを除きます。）又は連結確定申告書に係る申告の場合は、「確定」 (3) (1)又は(2)に係る修正申告の場合は、「修正中間」又は「修正確定」	修正申告の場合は、「この申告の基礎」の欄にも記載してください。
9 「法人税法の規定によって計算した法人税額①」	次に掲げる法人税の申告書を提出する法人の区分ごとに、それぞれに定める法人税の申告書の欄の金額を記載します。 (1) 別表1(1)を提出する法人 別表1(1)の10の欄の金額（ただし、この①の欄の上段の（ ）内に記載された金額（使途秘匿金税額等）がある場合には、当該金額を加算した合計額を記載します。以下(2)及び(3)においても同じです。） (2) 別表1(2)を提出する法人 別表1(2)の8の欄の金額 (3) 別表1(3)を提出する法人 別表1(3)の8の欄の金額 なお、（ ）内には、使途秘匿金の支出の額の40%相当額（別表1(1)の10の欄の上段に外書として記載された金額、別表1(2)の8の欄の上段に外書として記載された金額又は別表1(3)の8の欄の上段に外書として記載された金額）、リース特別控除戻税額（別表1(1)の5の欄、別表1(2)の5の欄又は別表1(3)の5の欄の金額）及び土地譲渡利益金額に対する法人税額（別表1(1)の7の欄、別表1(2)の7の欄又は別表1(3)の7の欄の金額）の合計額を記載します。	連結法人及び連結法人であった法人は、記載しないでください。

欄	記載のしかた	留意事項
10「試験研究費の額に係る法人税額の特別控除額②」	<p>次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれに定める金額を記載します。</p> <p>(1) 租税特別措置法第42条の4第1項（試験研究費の総額に係る税額控除）、第2項（特別試験研究費に係る税額控除）及び第3項（繰越税額控除限度超過額に係る税額控除）の規定の適用を受ける法人 法人税の明細書（別表6(6)）の27の欄の金額</p> <p>(2) 租税特別措置法第42条の4第6項（中小企業者等の試験研究費に係る税額控除）又は第7項（繰越中小企業者等税額控除限度超過額に係る税額控除）の規定の適用を受ける法人 零</p> <p>(3) 租税特別措置法第42条の4第9項（試験研究費の増加額等に係る法人税額の特別控除）の規定の適用を受ける法人（中小企業者等を除きます。） 法人税の明細書（別表6(8)）の19の欄の金額</p>	<p>連結法人及び連結法人であった法人は、記載しないでください。</p>
11「国際戦略総合特別区域及び雇用の数の増加に係る法人税額の特別控除額③」	<p>次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれに定める金額を記載します。</p> <p>(1) 租税特別措置法第42条の11第2項（国際戦略総合特別区域において機械等を取得した場合の法人税額の特別控除）及び第3項（繰越税額控除限度超過額に係る法人税額の特別控除）の規定の適用を受ける法人 法人税の明細書（別表6(25)）の24の欄の金額</p> <p>(2) 租税特別措置法第42条の12第1項（雇用の数が増加した場合の法人税額の特別控除）の規定の適用を受ける法人（中小企業者等を除きます。） 法人税の明細書（別表6(26)）の12の欄の金額</p>	<p>連結法人及び連結法人であった法人は、記載しないでください。</p>
12「還付法人税額等の控除額④」	<p>第20号様式別表2の3の④の計欄の金額を記載します。</p>	<p>連結法人及び連結法人であった法人は、記載しないでください。</p>
13「退職年金等積立金に係る法人税額⑤」	<p>法人税の申告書（別表19）の12の欄の金額を記載します。</p>	<p>(1) 連結法人及び連結法人であった法人は、記載しないでください。</p> <p>(2) 第20号の2様式の申告書を提出する法人も記載してください。</p>
14「課税標準となる法人税額又は個別帰属法人税額及びその法人税割額①+②+③-④+⑤⑥」	<p>(1) 次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれに定める金額を記載します。</p> <p>(イ) 連結法人及び連結法人であった法人以外の法人で、一の市町村にのみ事務所等を有する法人 ①+②+③-④+⑤の金額</p> <p>(ロ) 連結法人及び連結法人であった法人以外の法人で、2以上の市町村に事務所等を有する法人 第22号の2様式の⑥の欄の金額</p> <p>(ハ) 連結法人及び連結法人であった法人 第20号様式別表1の⑧の欄の金額</p> <p>(2) 「課税標準」の欄の金額に1,000円未満の端数があるとき、又はその全額が1,000円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨ててください。</p>	<p>税額の計算を行う場合の税率は、各市町村ごとに定められた税率によってください。</p>

欄	記載のしかた	留意事項
15 「2以上の市町村に事務所又は事業所を有する法人における課税標準となる法人税額又は個別帰属法人税額及びその法人税割額 $\frac{\text{⑥} \times \text{②}}{\text{①}}$ ⑦」	(1) 2以上の市町村に事務所等を有する法人が記載し、一の市町村にのみ事務所等を有する法人は記載する必要はありません。 (2) 「課税標準」の欄は、次のように記載します。 (イ) ⑥の欄の金額を②の欄の数値で除して得た額（この数値に小数点以下の数値があるときは、小数点以下の数値のうち②の欄の数値のけた数に1を加えた数に相当する数の位以下の部分の数値を切り捨てた数値）に②の欄の数値を乗じて得た額を記載します。ただし、主たる事務所等所在地の市町村長に提出するときは、第22号の2様式の「分割課税標準額」の欄の当該市町村分の金額を記載します。 (ロ) この金額に1,000円未満の端数があるとき、又はその全額が1,000円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨ててください。	(1) 税額の計算を行う場合の税率は、各市町村ごとに定められた税率によってください。 (2) 「課税標準」の欄の金額は、第22号の2様式の「分割課税標準額」の欄の当該市町村分の金額と一致します。
16 「外国の法人税等の額の控除額 ⑧」	第20号様式別表3の⑬の欄の金額（2以上の市町村に事務所等を有する法人にあっては、同表の⑱の欄の当該市町村分の金額）を記載します。	
17 「差引法人税割額⑥－⑧－⑨又は⑦－⑧－⑨ ⑩」	この金額に100円未満の端数があるとき、又はその全額が100円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨ててください。	
18 「既に納付の確定した当期分の法人税割額⑪」	既に納付の確定した当期分の法人税割額を記載し法人税法第89条（同法第145条の5において準用する場合を含みます。）の規定によって法人税に係る申告書を提出する義務がある法人がこの申告書を提出するときは、第20号の2様式の申告書の①又は②の欄の金額についても記載します。	
19 「租税条約の実施に係る法人税割額の控除額⑫」	「⑩の欄の金額－⑪の欄の金額」と「租税条約の実施に係る更正に伴う法人税割額」とのいずれか少ない金額を記載します。この場合において、その金額が負数となるときは記載しないでください。	
20 「算定期間中において事務所等を有していた月数⑭」	この月数は、暦に従って計算し、1月に満たないときは1月とし、1月に満たない端数を生じたときは切り捨ててください。	算定期間中に事務所等又は寮等の新設又は廃止があった場合は、その月数には新設又は廃止の日を含みません。
21 「円× $\frac{\text{⑭}}{12}$ ⑮」	(1) この金額に100円未満の端数があるときは、その端数金額は切り捨ててください。 (2) 指定都市に申告する場合は、「指定都市に申告する場合の⑮の計算」の欄の各区の均等割額の合計額又は第20号様式別表4の3の「均等割額の計」の欄の金額を記載します。	
22 「この申告により納付すべき市町村民税額⑬＋⑰ ⑱」	⑬又は⑰の欄に△印を付して記載した場合におけるこの欄の計算については、⑬又は⑰の欄を零として計算します。	
23 「⑱のうち見込納付額⑲」	法人税法第75条の2第1項（同法第145条において準用する場合を含みます。）の規定により確定申告書の提出期限が延長されている法人が市町村民税につき申告書の提出前に納付した金額又は同法第81条の24第1項の規定により連結確定申告書の提出期限が延長されている法人（当該法人との間に連結完全支配関係がある連結子法人（連結申告法人に限ります。）を含みます。）が市町村民税につき申告書の提出前に納付した金額を記載します。	
24 「当該市町村内に所在する事務所、事業所又は寮等」及び「分割基準」	2以上の市町村に事務所等を有する法人が従たる事務所等所在地の市町村長に提出する場合に記載します。 この場合における分割基準とは、法人税額の課税標準の算定期間又は連結法人税額の課税標準の算定期間（以下「算定期間」といいます。）の末日現在における従業者の数をいいます。ただし、次の(1)から(3)までに掲げる事務所等にあつては、それぞれ(1)から(3)に定める従業者の数（その数に1人に満たない端数を生じたときは、これを1人とします。）をいいます。	主たる事務所等所在地の市町村長に提出する場合は、記載する必要はありません。

欄	記載のしかた	留意事項
	<p>(1) 算定期間の中で新設された事務所等 算定期間の末日現在の従業者数× <u>新設された日から算定期間の末日までの月数</u> 算定期間の月数</p> <p>(2) 算定期間の中で廃止された事務所等 廃止された月の前月末現在の従業者数× <u>廃止された日までの月数</u> 算定期間の月数</p> <p>(3) 算定期間の各月の末日現在の従業者数のうち最も多い数が最も少ない数の2倍を超える事務所等 <u>算定期間の各月の末日現在の従業者数を合計した数</u> 算定期間の月数</p> <p>なお、月数の計算は、暦に従って計算し、1月に満たない端数を生じたときは、切り上げてください。</p>	
25「当該市町村分の均等割の税率適用区分に用いる従業者数」	算定期間の末日現在における事務所等又は寮等の従業者の数を記載します。なお、新設又は廃止された事務所等にあっても、算定期間の末日現在における従業者の数を記載します。	この従業者数と分割基準となる従業者数は異なる場合があります。
26「翌期の中間申告の要否」	<p>次に掲げる法人は「要」を、その他の法人は「否」を○印で囲んでください。</p> <p>(1) 連結申告法人以外の法人にあつては、当該事業年度の当該法人に係る法人税額（当該金額のうちにリース特別控除取戻税額等がある場合には、当該リース特別控除取戻税額等を控除した額）に6を乗じて得た金額を当該事業年度の月数で除して計算した金額が10万円を超える法人（翌期に法人税法第71条第1項（同法第72条第1項の規定が適用される場合及び同法第145条においてこれらの規定を準用する場合を含みます。）の規定によって中間申告をする必要のある法人を含みます。）</p> <p>(2) 連結申告法人にあつては、当該連結事業年度の当該連結法人に係る連結法人税個別帰属支払額（当該金額のうちに個別帰属リース特別控除取戻税額等がある場合には、当該個別帰属リース特別控除取戻税額等を控除した額）に6を乗じて得た金額を当該連結事業年度の月数で除して計算した金額が10万円を超える法人</p>	
27「法人税の申告書の種類」	<p>次に掲げる法人税の申告書を提出する法人の区分ごとに、それぞれに定める申告書の種類を○印で囲んでください。</p> <p>(1) 法人税法第2条第37号に規定する青色申告書を提出する法人 「青色」</p> <p>(2) その他の申告書を提出する法人 「その他」</p>	
28「法人税の申告期限の延長の区分の有無」	<p>次に掲げる法人は「有」を、その他の法人は「無」を○印で囲んでください。</p> <p>(1) 法人税法第75条の2第1項（同法第145条において準用する場合を含みます。）の規定により法人税の確定申告書の提出期限が延長されている連結申告法人以外の法人（同法第75条の2第6項（同法第145条において準用する場合を含みます。）において準用する同法第75条第5項の規定により当該提出期限が延長されたものとみなされた場合を含みます。）</p> <p>(2) 連結申告法人のうち、法人税法第81条の24第1項の規定により法人税の連結確定申告書の提出期限が延長されている連結親法人（同条第3項の規定において準用する同法第75条第5項の規定により当該提出期限が延長されたものとみなされた場合を含みます。）及び当該法人との間に連結完全支配関係がある連結子法人</p>	
29「還付請求税額」	中間納付額の還付を受けようとする場合においてその中間納付額の還付請求書に代わるものとして記載することができます。この場合において、還付請求額として記載する額は、㊸の欄又は㊹の欄に△印を付した法人税割額又は均等割額と同額になります。	

欄	記載のしかた	留意事項
30「法第15条の4の徴収猶予を受けようとする税額」	2以上の市町村に事務所等を有する法人が修正申告に係る税額につき徴収猶予を受けようとする場合において第1号様式による届出書に代えようとするものが記載してください。この場合において記載する金額は、⑬の欄に記載した金額と同額になります。	
31「指定都市に申告する場合の⑮の計算」	指定都市に申告する場合にのみ、次により記載します。 (1) 事務所等又は寮等の所在する区ごとに記載します。 (2) 「※区コード」の欄は記載する必要はありません。 (3) 「従業者数」の欄は、算定期間の末日現在における事務所等又は寮等の従業者数を記載します。なお、新設又は廃止された事務所等にあっても、算定期間の末日現在における従業者数を記載します。	9以上の区に、事務所等又は寮等を有する場合は、この欄には記載せず第20号様式別表4の3を添付してください。

第20号様式別表 1 記載の手引

1 この計算書の用途等

この計算書は、連結法人及び連結法人であった法人が記載し、第20号様式の申告書に添付してください。

2 各欄の記載のしかた

欄	記載のしかた	留意事項
1 「※処理事項」		記載する必要はありません。
2 金額の単位区分（けた）のある欄	単位区分に従って正確に記載してください。また記載すべき金額が赤字額となるときは、その金額の直前の単位（けた）に△印を付してください。	
3 「法人税法の規定によって計算した連結法人税額に係る個別帰属額又は法人税法の規定によって計算した法人税額①」	次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれに定める個別帰属額等を記載した書類又は法人税の申告書の欄の金額を記載します。 (1) 連結申告法人 (イ) 「各連結事業年度の連結法人税の個別帰属額の届出書－連結親法人が普通法人（特定の医療法人を除く。）である連結法人の分」（以下「個別帰属額届出書（普通法人分）」といいます。）を提出する法人 個別帰属額届出書（普通法人分）の10の欄の金額（ただし、租税特別措置法第68条の9第10項の規定により加算された金額（同条第6項又は第7項の規定により控除された金額を除きます。）及び同法第68条の15第5項の規定により加算された金額の個別帰属額がある場合には、当該個別帰属額を控除し、この①の欄の上段の（ ）内に記載された金額（個別帰属リース特別控除取戻税額等）がある場合には、当該金額を加算した合計額を記載します。以下(ロ)及び(ハ)においても同じです。） (ロ) 「各連結事業年度の連結法人税の個別帰属額の届出書－連結親法人が協同組合等である連結法人の分」（以下「個別帰属額届出書（協同組合等分）」といいます。）を提出する法人 個別帰属額届出書（協同組合等分）の8の欄の金額 (ハ) 「各連結事業年度の連結法人税の個別帰属額の届出書－連結親法人が特定の医療法人である連結法人の分」（以下「個別帰属額届出書（特定医療法人分）」といいます。）を提出する法人 個別帰属額届出書（特定医療法人分）の8の欄の金額 なお、（ ）内には、使途秘匿金の支出の額の40%相当額に係る個別帰属額（個別帰属額届出書（普通法人分）の10の欄の上段に外書として記載された金額、個別帰属額届出書（協同組合等分）の8の欄の上段に外書として記載された金額又は個別帰属額届出書（特定医療法人分）の8の欄の上段に外書として記載された金額）、個別リース特別控除取戻税額（個別帰属額届出書（普通法人分）の5の欄、個別帰属額届出書（協同組合等分）の5の欄又は個別帰属額届出書（特定医療法人分）の5の欄の金額（租税特別措置法第68条の9第11項の規定により加算された金額（同条第6項又は第7項の規定により控除された金額を除きます。）の個別帰属額がある場合には、当該個別帰属額を除きます。）及び個別土地譲渡利益金額に対する法人税額（個別帰属額届出書（普通法人分）の7の欄、個別帰属額届出書（協同組合等分）の7の欄又は個別帰属額届出書（特定医療法人分）の7の欄の金額）の合計額（これらの金額がない場合は零）を記載します。	

欄	記載のしかた	留意事項
	<p>(2) 連結申告法人以外の法人</p> <p>(イ) 別表1(1)を提出する法人 別表1(1)の10の欄の金額(ただし、租税特別措置法第42条の4第11項(第1号のうち同法第68条の9第6項に規定する試験研究費に係る部分及び第4号に係る部分を除きます。)の規定により加算された金額及び同法第42条の11第5項の規定により加算された金額がある場合には、当該加算された金額を控除し、この①の欄の上段の()内に記載された金額(リース特別控除取戻税額等)がある場合には、当該金額を加算した合計額を記載します。以下(ロ)及び(ハ)においても同じです。)</p> <p>(ロ) 別表1(2)を提出する法人 別表1(2)の8の欄の金額</p> <p>(ハ) 別表1(3)を提出する法人 別表1(3)の8の欄の金額</p> <p>なお、()内には、使途秘匿金の支出の額の40%相当額(別表1(1)の10の欄の上段に外書として記載された金額、別表1(2)の8の欄の上段に外書として記載された金額又は別表1(3)の8の欄の上段に外書として記載された金額)、リース特別控除取戻税額(別表1(1)の5の欄、別表1(2)の5の欄又は別表1(3)の5の欄の金額。ただし、これらの欄の上段に外書として記載された金額(租税特別措置法第42条の4第11項(第1号のうち同法第68条の9第6項に規定する試験研究費に係る部分及び第4号に係る部分を除きます。)の規定により加算された金額及び同法第42条の11第5項の規定により加算された金額がある場合には、当該加算された金額を除きます。)がある場合には、当該金額を加算した合計額)及び土地譲渡利益金額に対する法人税額(別表1(1)の7の欄、別表1(2)の7の欄又は別表1(3)の7の欄の金額)の合計額を記載します。</p>	
<p>4 「試験研究費の額に係る連結法人税額の特別控除額に係る個別帰属額又は試験研究費の額に係る法人税額の特別控除額②」</p>	<p>(1) 連結申告法人以外の法人にあつては、次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれに定める金額を記載します。</p> <p>(イ) 租税特別措置法第42条の4第1項(試験研究費の総額に係る税額控除)、第2項(特別試験研究費に係る税額控除)及び第3項(繰越税額控除限度超過額に係る税額控除)の規定の適用を受ける法人 法人税の明細書(別表6(6))の27の欄の金額</p> <p>(ロ) 租税特別措置法第42条の4第6項(中小企業者等の試験研究費に係る税額控除)又は第7項(繰越中小企業者等税額控除限度超過額に係る税額控除)の規定の適用を受ける法人 零</p> <p>(ハ) 租税特別措置法第42条の4第9項(試験研究費の増加額等に係る法人税額の特別控除)の規定の適用を受ける法人(中小企業者等を除きます。) 法人税の明細書(別表6(8))の19の欄の金額</p> <p>(2) 連結申告法人にあつては、次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれに定める金額を記載します。</p> <p>(イ) 租税特別措置法第68条の9第1項(試験研究費の総額に係る税額控除)、第2項(特別試験研究費に係る税額控除)及び第3項(連結繰越税額控除限度超過額に係る税額控除)の規定の適用を受ける法人 法人税の明細書(別表6の2(3)付表2)の4の欄、8の欄及び36の欄の金額の合計額</p> <p>(ロ) 租税特別措置法第68条の9第6項(中小連結法人の試験研究費に係る税額控除)又は第7項(繰越中小連結法人税額控除限度超過額に係る税額控除)の規定の適用を受ける法人 零</p>	

欄	記載のしかた	留意事項
	(Ⅱ) 租税特別措置法第68条の9第9項（試験研究費の増加額等に係る法人税額の特別控除）の規定の適用を受ける法人（中小連結親法人等を除きます。） 法人税の明細書（別表6の2(5)付表）の11の欄の金額	
5「国際戦略総合特別区域及び雇 用者の数の増加に係る連結法人 税額の特別控除額に係る個別帰 属額又は国際戦略総合特別区 域及び雇用の数の増加に係る法 人税額の特別控除額③」	(1) 連結申告法人以外の法人にあつては、次に掲げる法人の区 分ごとに、それぞれに定める金額を記載します。 (イ) 租税特別措置法第42条の11第2項（国際戦略総合特別区 域において機械等を取得した場合の法人税額の特別控除） 及び第3項（繰越税額控除限度超過額に係る法人税額の特別 控除）の規定の適用を受ける法人 法人税の明細書（別 表6(25)）の24の欄の金額 (ロ) 租税特別措置法第42条の12第1項（雇用者の数が増加し た場合の法人税額の特別控除）の規定の適用を受ける法人 （中小企業者等を除きます。） 法人税の明細書（別表6 (26)）の12の欄の金額 (2) 連結申告法人にあつては、次に掲げる法人の区分ごとに、 それぞれに定める金額を記載します。 (イ) 租税特別措置法第68条の15第2項（国際戦略総合特別区 域において機械等を取得した場合の法人税額の特別控除） 及び第3項（繰越税額控除限度超過額に係る法人税額の特別 控除）の規定の適用を受ける法人 法人税の明細書（別 表6の2(14)）の20の欄の金額 (ロ) 租税特別措置法第68条の15の2（雇用者の数が増加した 場合の法人税額の特別控除）の規定の適用を受ける法人（中 小連結親法人等を除きます。） 法人税の明細書（別表6 の2(15)）の7の欄の金額	
6「差引個別帰属法人税額（① +②+③）と①の括弧書） のうちいずれか多い額）又は 差引法人税額（①+②+③） ④」	次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれに定める金額を記載 します。 (1) 連結申告法人 ①+②+③の金額と①の欄の上段の（ ） 内の金額のうちいずれか多い金額 (2) 連結申告法人以外の法人 ①+②+③の金額 この場合において、その金額が負数となる場合は零を記載 します。	
7「控除対象個別帰属調整額及び 控除対象個別帰属税額の控除 額⑤」	第20号様式別表2の⑤の計欄の金額及び第20号様式別表2の 2の④の計欄の金額の合計額を記載します。	
8「控除対象個別帰属還付税額及 び控除対象還付法人税額の控 除額⑥」	第20号様式別表2の3の⑤の計欄の金額を記載します。	
9「退職年金等積立金に係る法人 税額⑦」	法人税の申告書（別表19）の12の欄の金額を記載します。	
10「課税標準となる個別帰属法人 税額又は法人税額 ④-⑤-⑥+⑦⑧」	この金額に1,000円未満の端数があるとき、又はその全額が1, 000円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨 ててください。	
11「当期に発生した控除対象個別 帰属税額（①の括弧書）-（① +②+③）⑨」	(1) ①の欄の上段の（ ）内の金額から①+②+③の金額を差 し引いた金額を記載します。 この場合において、その金額が負数になる場合は記載しな いください。 (2) この欄の金額は、第20号様式別表2の2の「当期分」の欄 の①の欄に転記してください。	①+②+③の金額が負数 であっても、そのまま負数 として計算します。
12「法人税における連結納税の承 認の有無⑩」	連結法人に該当する場合は「有（連結法人）」を、その他の 法人は「無（連結法人以外の法人）」を○印で囲んでください。	
13「連結親法人・子法人の区分⑪」	連結親法人にあつては「連結親法人」を、連結子法人にあつ ては「連結子法人」を○印で囲んでください。	⑩の欄において「有（連 結法人）」を○印で囲んだ 法人が記載してください。

欄	記載のしかた	留意事項
14「連結親法人の区分⑫」	⑫の欄において「連結親法人」を○印で囲んだ法人は自らの区分を、「連結子法人」を○印で囲んだ法人は当該法人との間に連結完全支配関係がある連結親法人の区分を○印で囲んでください。	⑫の欄において「有（連結法人）」を○印で囲んだ法人が記載してください。
15「連結子法人の区分⑬」	法人税法第81条の9第2項第1号に規定する特定連結子法人にあつては「特定連結子法人」を、その他の連結子法人にあつては「非特定連結子法人」を○印で囲んでください。	⑬の欄において「連結子法人」を○印で囲んだ法人が記載してください。
16「法人税の申告区分⑭」	連結申告法人にあつては「連結申告」を、その他の法人にあつては「単体申告」を○印で囲んでください。	⑭の欄において「有（連結法人）」を○印で囲んだ法人が記載してください。

第20号様式別表 2 記載の手引

1 この明細書の用途等

この明細書は、当該事業年度又は連結事業年度開始の日前7年以内に開始した事業年度において生じた連結適用前欠損金額又は連結適用前災害損失欠損金額について、法第321条の8第5項の規定の適用を受けようとする場合に記載し、第20号様式の申告書に添付してください。

また、当該連結適用前欠損金額又は連結適用前災害損失欠損金額の生じた事業年度後最初の最初連結事業年度においては法人税法第81条の9第2項の規定の適用がないことを証する書類も併せて添付してください。

2 各欄の記載のしかた

欄	記載のしかた	留意事項
1 「連結適用前欠損金額又は連結適用前災害損失欠損金額①」	当該事業年度又は連結事業年度開始の日前7年以内に開始した事業年度において生じた連結適用前欠損金額又は連結適用前災害損失欠損金額について、古い事業年度又は連結事業年度の分から順次記載します。	
2 「控除対象個別帰属調整額②」	「連結適用前欠損金額又は連結適用前災害損失欠損金額①」の欄に記載した金額に、最初連結事業年度の終了の日における次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれに定める率を乗じて得た金額を記載します。 (1) 普通法人である連結親法人との間に連結完全支配関係がある連結子法人 100分の30 (2) 協同組合等である連結親法人との間に連結完全支配関係がある連結子法人 100分の23 (3) 租税特別措置法第68条の100第1項の承認を受けている同項に規定する医療法人である連結親法人との間に連結完全支配関係がある連結子法人 100分の23	
3 「控除未済額④」	②の欄の金額から③の欄の金額を差し引いた金額（前期分のこの明細書の「翌期繰越額」）を古い事業年度又は連結事業年度の分から順次記載します。	
4 「当期控除額⑤」	④の欄の金額と第20号様式別表1の④の欄の金額のうちいずれか低い金額を記載します。この場合において、第20号様式別表1の①の欄の上段の（ ）内に記載された金額があるときは、第20号様式別表1の④の欄の金額は、第20号様式別表1の①の欄の上段の（ ）内に記載された金額を控除したものと計算します。	

第20号様式別表2の2記載の手引

1 この明細書の用途等

この明細書は、当該事業年度又は連結事業年度開始の日前7年以内に開始した連結事業年度において生じた控除対象個別帰属税額について、法第321条の8第9項の規定の適用を受けようとする場合に記載し、第20号様式の申告書に添付してください。

2 各欄の記載のしかた

欄	記載のしかた	留意事項
1「控除対象個別帰属税額①」	当該事業年度又は連結事業年度の開始の日前7年以内に開始した連結事業年度において生じた控除対象個別帰属税額について、古い連結事業年度又は事業年度の分から順次記載します。	
2「控除未済額③」	①の欄の金額から②の欄の金額を差し引いた金額（前期分のこの明細書の「翌期繰越額」）を古い連結事業年度又は事業年度の分から順次記載します。	
3「当期控除額④」	③の欄の金額と第20号様式別表1の④の欄の金額のうちいずれか低い金額を記載します。この場合において、第20号様式別表1の①の欄の上段の（ ）内に記載された金額があるときは、第20号様式別表1の④の欄の金額は、第20号様式別表1の①の欄の上段の（ ）内に記載された金額を控除したものと計算します。	

第20号様式別表2の3記載の手引

1 この明細書の用途等

この明細書は、当該事業年度開始の日前7年以内に開始した事業年度又は当該連結事業年度開始の日前7年以内に開始した事業年度において生じた控除対象還付法人税額及び当該事業年度又は連結事業年度開始の日前7年以内に開始した連結事業年度において生じた控除対象個別帰属還付税額について、法第321条の8第12項又は第15項の適用を受けようとする場合に記載し、第20号様式の申告書に添付してください。

2 各欄の記載のしかた

欄	記載のしかた	留意事項
1「控除対象還付法人税額又は控除対象個別帰属還付税額①」	当該事業年度開始の日前7年以内に開始した事業年度又は当該連結事業年度開始の日前7年以内に開始した事業年度において法人税法第80条（同法第145条において準用する場合を含みます。）の規定によって欠損金の繰戻しにより還付を受けた法人税額及び当該事業年度又は連結事業年度開始の日前7年以内に開始した連結事業年度において同法第81条の31の規定によって連結欠損金の繰戻しにより還付を受けた法人税額のうち当該法人に帰せられる額について、古い事業年度又は連結事業年度の分から順次記載します。	
2「控除未済額③」	①の欄の金額から②の欄の金額を差し引いた金額（前期分のこの明細書の「翌期繰越額」）を古い事業年度又は連結事業年度の分から順次記載します。	
3「当期控除額④」	次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれに掲げる金額を記載します。この場合において、(1)の場合には、第20号様式の①の欄の（ ）内に記載された金額があるときは、第20号様式の①の欄の金額は、第20号様式の①の欄の（ ）内に記載された金額を控除したものとして計算し、(2)の場合には、第20号様式別表1の①の欄の上段の（ ）内に記載された金額があるときは、第20号様式別表1の④の欄の金額は、第20号様式別表1の①の欄の上段の（ ）内に記載された金額を控除したものとして計算します。 (1) 連結法人及び連結法人であった法人以外の法人 ③の欄の金額と第20号様式の①+②+③の金額のうちいずれか低い金額 (2) 連結法人及び連結法人であった法人 ③の欄の金額と第20号様式別表1の④の欄の金額のうちいずれか低い金額（ただし、第20号様式別表1の⑤の欄に金額が記載されている場合には、③の欄の金額と第20号様式別表1の④の欄の金額から第20号様式別表1の⑤の欄の金額を控除した金額のうちいずれか低い金額）	

第20号様式別表3、別表4、別表4の2、別表4の2の2、別表4の2の3、別表4の2の4及び別表4の2の5記載の手引

欄 等		記 載 の し か た	留 意 事 項
別 表 三	1 用途等	この明細書は、外国において課された外国の法人税等の額を法人税割額から控除をしようとする場合に記載し、第20号様式の申告書に添付してください。	
	2「政令第48条の13第5項ただし書の規定の適用の有無」	市町村民税の控除限度額を政令第48条の13第5項ただし書の規定により計算する法人にあつては「有」を、政令第48条の13第5項本文の規定により計算する法人にあつては「無」を○印で囲んでください。	政令第48条の13第5項ただし書の規定により計算する法人とは、事務所又は事業所（以下この記載の手引において「事務所等」といいます。）の所在する市町村が実際に採用する税率に相当する割合を用いて計算するものを、同項本文の規定により計算する法人とは、100分の12.3を用いて計算するものをいいます。以下同じです。
	3「当期の控除対象外国税額①」	連結申告法人以外の法人にあつては法人税の明細書（別表6(2)の1の欄の金額を、連結申告法人にあつては法人税の明細書（別表6の2(2)付表）の1の欄の金額を記載します。	
	4「前3年以内の控除限度額を超える外国税額②」	前3年以内の各事業年度又は各連結事業年度において課された外国税額のうち、前期までに法人税、道府県民税の法人税割及び市町村民税の法人税割の額から控除されなかった部分の額を記載します。	
	5「国税の控除限度額④」	連結申告法人以外の法人にあつては法人税の明細書（別表6(2)の17の欄の金額を、連結申告法人にあつては法人税の明細書（別表6の2(2)付表）の9の欄の金額を記載します。	
	6「道府県民税の控除限度額⑤」	道府県民税の控除限度額を政令第9条の7第4項本文の規定により計算する法人は、国税の控除限度額に100分の5を乗じて計算した金額を記載し、道府県民税の控除限度額を政令第9条の7第4項ただし書の規定により計算する法人は、第6号様式別表4の2の⑦の欄の金額を記載します。	政令第9条の7第4項本文の規定により計算する法人とは一定率（100分の5）を用いて計算するものをいい、同項ただし書の規定により計算する法人とは、事務所等の所在する都道府県の実際に採用する税率に相当する割合を用いて計算するものをいいます。
	7「市町村民税の控除限度額⑦」	市町村民税の控除限度額を政令第48条の13第5項本文の規定により計算する法人は、国税の控除限度額に100分の12.3を乗じて計算した金額を記載し、市町村民税の控除限度額を政令第48条の13第5項ただし書の規定により計算する法人は、第20号様式別表4の2の⑦の欄の金額を記載します。	
	8「前3年以内の控除未済外国税額の明細」	(1) 前3年以内の各事業年度又は各連結事業年度において市町村民税の法人税割額から控除することができる外国税額が当該各事業年度又は各連結事業年度の法人税割額を超えることとなったため控除することができなかった額がある場合に記載します。 (2) 「控除未済外国税額⑩」の欄は、次に掲げる場合にあつては、それぞれに定める金額を記載します。 (イ) この申告書を提出する法人を合併法人、分割承継法人若しくは被現物出資法人又は被事後設立法人とする適格合併等が行われた場合 政令第48条の13第19項の規定の適用があるときの当該適格合併等の日の属する事業年度又は連結事業年度にあつては、第20号様式別表4の2の4の⑦の欄の金額	

欄 等		記 載 の し か た	留 意 事 項
		(Ⅶ) この申告書を提出する法人を分割法人若しくは現物出資法人又は事後設立法人とする適格分割等が行われた場合 政令第48条の13第26項の規定の適用があるときの当該適格分割等の日の属する事業年度又は連結事業年度にあっては、第20号様式別表4の2の5の⑤の欄の金額	
	9「各市町村ごとに控除する外国税額の明細」	<p>2以上の市町村に事務所等を有する法人が次のように記載します。</p> <p>(1) 「従業員数又は補正後の従業員数」の欄は、市町村民税の控除限度額を政令第48条の13第5項本文の規定により計算する法人にあっては、法人税額の課税標準の算定期間又は連結法人税額の課税標準の算定期間（以下この記載の手引において「算定期間」といいます。）の末日現在の従業員数を記載し、市町村民税の控除限度額を政令第48条の13第5項ただし書の規定により計算する法人にあっては、第20号様式別表4の2の⑧の欄の補正後の従業員数を記載します。</p> <p>(2) 各市町村ごとの「控除すべき外国税額⑩」の欄の計算は、「当期分の控除外国税額⑩」及び「前3年以内の控除未済外国税額⑩」の合計額を各市町村ごと（特別区の存する区域において都民税の法人税割を課する場合の都を含む。）に従業員数又は補正後の従業員数によりあん分して行います。この場合において、当該算定した外国税額に1円未満の端数があるときは、その端数を切り捨ててください。</p> <p>(3) 「各市町村ごとに算定した法人税割額⑪」の欄は、各市町村ごとに算定した当該事業年度分又は連結事業年度分の法人税割額（第20号様式の⑦の欄に記載すべき法人税割額で100円未満の端数を切り捨てる前の金額）を記載します。</p>	
別 表 四	1 用途等	<p>(1) この明細書は、第20号様式別表3に併せて提出してください。</p> <p>(2) この明細書の各欄に記載する金額は、第20号様式別表3及び法人税の明細書（別表6(3)）の各欄に記載する金額とおおむね一致しますから、これらの明細書に記載したところに準じて記載してください。</p>	
	2「前3年以内の控除余裕額又は控除限度額を超える外国税額の明細」	<p>(1) 「控除余裕額」欄の「前期からの繰越」の欄は、次に掲げる場合にあっては、それぞれに定める金額を記載します。</p> <p>(イ) この明細書を提出する法人を合併法人、分割承継法人若しくは被現物出資法人又は被事後設立法人とする適格合併等が行われた場合 政令第48条の13第7項の規定の適用があるときの当該適格合併等の日の属する事業年度又は連結事業年度にあっては、第20号様式別表4の2の2の⑩の欄の金額</p> <p>(Ⅱ) この明細書を提出する法人を分割法人若しくは現物出資法人又は事後設立法人とする適格分割等が行われた場合 政令第48条の13第16項の規定の適用があるときの当該適格分割等の日の属する事業年度又は連結事業年度にあっては、第20号様式別表4の2の3の⑤の欄の金額</p> <p>(2) 「控除限度額を超える外国税額」欄の「前期からの繰越額」の欄は、次に掲げる場合にあっては、それぞれに定める金額を記載します。</p> <p>(イ) この明細書を提出する法人を合併法人、分割承継法人若しくは被現物出資法人又は被事後設立法人とする適格合併等が行われた場合 政令第48条の13第7項の規定の適用があるときの当該適格合併等の日の属する事業年度又は連結事業年度にあっては、第20号様式別表4の2の2の⑩の欄の金額</p>	

欄 等		記 載 の し か た	留 意 事 項
		(M) この明細書を提出する法人を分割法人若しくは現物出資法人又は事後設立法人とする適格分割等が行われた場合 政令第48条の13第16項の規定の適用があるときの当該適格分割等の日の属する事業年度又は連結事業年度にあっては、第20号様式別表4の2の3の⑩の欄の金額	
別 表 四 の 二	1 用途等	この明細書は、市町村民税の控除限度額を政令第48条の13第5項ただし書の規定により計算する場合に記載し、第20号様式別表3（都民税に係る場合にあつては第6号様式別表3の2）に併せて提出してください。	
	2 「国税の控除限度額①」	連結申告法人以外の法人にあつては法人税の明細書（別表6(2)）の17の欄の金額を、連結申告法人にあつては法人税の明細書（別表6の2(2)附表）の9の欄の金額を記載します。	
	3 「従業者数②」	算定期間の末日現在の従業者の数を各市町村（特別区の存する区域において都民税の法人税割を課する場合の都を含みます。以下同じ。）ごとに記載します。	
	4 「②であん分した国税の控除限度額④」	「国税の控除限度額①」の欄の金額を従業者数の「合計③」の欄の総従業者数で除して1人当たりの金額（当該除して得た数値に小数点以下の数値があるときは、当該小数点以下の数値のうち当該従業者数の総数のけた数に1を加えた数に相当する数の位以下の部分の数値を切り捨ててください。）を算出し、当該1人当たりの金額に「従業者数②」の欄の各市町村ごとの従業者の数を乗じて得た金額を記載します。この場合において、当該乗じて得た金額に1円未満の端数があるときは、その端数を切り捨ててください。	
	5 「税率⑤」	当該事業年度分又は連結事業年度分に適用される各市町村ごとの市町村民税の法人税割の税率を記載します。この場合において、特別区の存する区域に事務所等を有する法人にあつては、当該区域の従業者数に対応する欄には、特別区の存する区域において課する都民税の法人税割の税率に相当する割合から当該割合に17.3分の5を乗じて得た割合（当該乗じて得た割合に小数点以下1位未満の端数があるときは、その端数を四捨五入してください。）を控除した割合を記載します。	
	6 「市町村民税の控除限度額⑥」	各市町村ごとの④の欄の金額に各市町村ごとの⑤の欄の税率を乗じて得た金額を記載します。この場合において、当該乗じて得た金額に1円未満の端数があるときはその端数を切り捨ててください。	
	7 「補正後の従業者数⑧」	各市町村ごとの②の欄の従業者数に各市町村ごとの⑤の欄の税率を乗じて得た数を100分の12.3で除して得た従業者数を記載します。この場合において、当該除して得た従業者数に1人に満たない端数があるときは、その端数を切り捨ててください。	
別 表 四 の 二 の 二	1 用途等	この明細書は、政令第48条の13第7項の規定の適用を受ける場合に記載し、第20号様式別表4に併せて提出してください。	
	2 「被合併法人等の控除余裕額①」	次に掲げる場合に応じ、それぞれに定める金額を記載します。 (1) この明細書を提出する法人を合併法人とする適格合併が行われた場合 当該適格合併に係る被合併法人の当該適格合併の日の前日の属する事業年度又は連結事業年度の第20号様式別表4の「控除余裕額」欄の「翌期繰越額」の欄の金額 (2) 平成22年9月30日までの間に、この明細書を提出する法人を分割承継法人とする適格分割型分割が行われた場合 当該適格分割型分割に係る分割法人の当該適格分割型分割の日の前日の属する事業年度又は連結事業年度の第20号様式別表4の「控除余裕額」欄の「翌期繰越額」の欄の金額	

欄 等	記 載 の し か た	留 意 事 項
	(3) この明細書を提出する法人を分割承継法人若しくは被現物出資法人又は被事後設立法人とする適格分割等が行われた場合 当該適格分割等に係る分割法人若しくは現物出資法人又は事後設立法人の当該適格分割等の日の属する事業年度又は連結事業年度開始の日の前日の属する事業年度又は連結事業年度の第20号様式別表4の「控除余裕額」欄の「翌期繰越額」の欄の金額	
3 「分割法人等の国外所得金額又は個別国外所得金額②」	次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれに定める金額を記載します。 (1) 連結申告法人以外の法人 「被合併法人等の控除余裕額①」の欄の金額に係る事業年度の分割法人若しくは現物出資法人又は事後設立法人の法人税の明細書(別表6(2))の「国外所得の金額(9)」の欄の金額 (2) 連結申告法人 「被合併法人等の控除余裕額①」の欄の金額に係る連結事業年度の分割法人若しくは現物出資法人又は事後設立法人の法人税の明細書(別表6の2(2)付表)の「個別国外所得の金額(3)」の欄の金額	
4 「当該法人の控除余裕額とみなされる金額④」	(1) この明細書を提出する法人を合併法人とする適格合併が行われた場合 …………… ①又は① $\frac{\text{㊸}}{\text{㊹}}$ (2) この明細書を提出する法人を分割承継法人若しくは被現物出資法人又は被事後設立法人とする適格分割若しくは適格現物出資又は適格事後設立が行われた場合 …………… ①又は① $\times \frac{\text{㊸}}{\text{㊹}}$	
5 「被合併法人等の控除限度額を超える外国税額⑤」	次に掲げる場合に応じ、それぞれに定める金額を記載します。 (1) この明細書を提出する法人を合併法人とする適格合併が行われた場合 当該適格合併に係る被合併法人の当該適格合併の日の前日の属する事業年度又は連結事業年度の第20号様式別表4の「控除限度額を超える外国税額」欄の「翌期繰越額」の欄の金額 (2) 平成22年9月30日までの間に、この明細書を提出する法人を分割承継法人とする適格分割型分割が行われた場合 当該適格分割型分割に係る分割法人の当該適格分割型分割の日の前日の属する事業年度又は連結事業年度の第20号様式別表4の「控除限度額を超える外国税額」欄の「翌期繰越額」の欄の金額 (3) この明細書を提出する法人を分割承継法人若しくは被現物出資法人又は被事後設立法人とする適格分割等が行われた場合 当該適格分割等に係る分割法人若しくは現物出資法人又は事後設立法人の当該適格分割等の日の属する事業年度又は連結事業年度開始の日の前日の属する事業年度又は連結事業年度の第20号様式別表4の「控除限度額を超える外国税額」欄の「翌期繰越額」の欄の金額	
6 「分割法人等の外国の法人税等の額⑥」	「被合併法人等の控除限度額を超える外国税額⑤」の欄の金額に係る事業年度又は連結事業年度の分割法人若しくは現物出資法人又は事後設立法人の法人税の明細書(別表6(2)の2)の「当期の控除対象外国法人税額又は個別控除対象外国法人税額(24)」の欄の金額を記載します。	

欄 等	記 載 の し か た	留 意 事 項
7「当該法人の控除限度額を超える外国税額とみなされる金額⑧」	<p>(1) この明細書を提出する法人を合併法人とする適格合併が行われた場合</p> <p>…………… ⑤又は⑥ × ⑧</p> <p>(2) この明細書を提出する法人を分割承継法人若しくは被現物出資法人又は被事後設立法人とする適格分割若しくは適格現物出資又は適格事後設立が行われた場合</p> <p>…………… ⑥ 又は ⑤ × $\frac{⑦}{⑥}$</p>	
別表四の二三 1 用途等	この明細書は、政令第48条の13第16項の規定の適用を受ける場合に記載し、第20号様式別表4に併せて提出してください。	
2「当該法人の控除余裕額①」	<p>次に掲げる場合に応じ、それぞれに定める金額を記載します。</p> <p>(1) 平成22年9月30日までの間に、この明細書を提出する法人を分割法人とする適格分割型分割が行われた場合 当該法人の当該適格分割型分割の日の前日の属する事業年度又は連結事業年度の第20号様式別表4の「控除余裕額」欄の「翌期繰越額」の欄の金額</p> <p>(2) この明細書を提出する法人を分割法人若しくは現物出資法人又は事後設立法人とする適格分割等が行われた場合 当該法人の当該適格分割等の日の属する事業年度又は連結事業年度開始の日の前日の属する事業年度又は連結事業年度の第20号様式別表4の「控除余裕額」欄の「翌期繰越額」の欄の金額</p>	
3「当該法人の国外所得金額又は個別国外所得金額②」	<p>次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれに定める金額を記載します。</p> <p>(1) 連結申告法人以外の法人 「当該法人の控除余裕額①」の欄の金額に係る事業年度の法人税の明細書（別表6(2)）の9の欄の金額</p> <p>(2) 連結申告法人 「当該法人の控除余裕額①」の欄の金額に係る連結事業年度の法人税の明細書（別表6の2(2)附表）の3の欄の金額</p>	
4「当該法人の控除限度額を超える外国税額⑥」	<p>次に掲げる場合に応じ、それぞれに定める金額を記載します。</p> <p>(1) 平成22年9月30日までの間に、この明細書を提出する法人を分割法人とする適格分割型分割が行われた場合 当該法人の当該適格分割型分割の日の前日の属する事業年度又は連結事業年度の第20号様式別表4の「控除限度額を超える外国税額」欄の「翌期繰越額」の欄の金額</p> <p>(2) この明細書を提出する法人を分割法人若しくは現物出資法人又は事後設立法人とする適格分割等が行われた場合 当該法人の当該適格分割等の日の属する事業年度又は連結事業年度開始の日の前日の属する事業年度又は連結事業年度の第20号様式別表4の「控除限度額を超える外国税額」欄の「翌期繰越額」の欄の金額</p>	
5「当該法人の外国の法人税等の額⑦」	「当該法人の控除限度額を超える外国税額⑥」の欄の金額に係る事業年度又は連結事業年度の法人税の明細書（別表6(2)）の24の欄の金額を記載します。	

欄 等		記 載 の し か た	留 意 事 項
別 表 四 の 二 の 四	1 用途等	この明細書は、政令第48条の13第19項の規定の適用を受ける場合に記載し、第20号様式別表3に併せて提出してください。	
	2 「被合併法人等の控除未済外国税額①」	次に掲げる場合に応じ、それぞれに定める金額を記載します。 (1) この明細書を提出する法人を合併法人とする適格合併が行われた場合 当該適格合併に係る被合併法人の当該適格合併の日の前日の属する事業年度又は連結事業年度の第20号様式別表3の「翌期繰越額⑩」の欄の金額 (2) 平成22年9月30日までの間に、この明細書を提出する法人を分割承継法人とする適格分割型分割が行われた場合 当該適格分割型分割に係る分割法人の当該適格分割型分割の日の前日の属する事業年度又は連結事業年度の第20号様式別表3の「翌期繰越額⑩」の欄の金額 (3) この明細書を提出する法人を分割承継法人若しくは被現物出資法人又は被事後設立法人とする適格分割等が行われた場合 当該適格分割等に係る分割法人若しくは現物出資法人又は事後設立法人の当該適格分割等の日の属する事業年度又は連結事業年度開始の日の前日の属する事業年度又は連結事業年度の第20号様式別表3の「翌期繰越額⑩」の欄の金額	
	3 「分割法人等の国外所得金額又は個別国外所得金額②」	次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれに定める金額を記載します。 (1) 連結申告法人以外の法人 「被合併法人等の控除未済外国税額①」の欄の金額に係る事業年度の分割法人若しくは現物出資法人又は事後設立法人の法人税の明細書（別表6(2)）の9の欄の金額 (2) 連結申告法人 「被合併法人等の控除未済外国税額①」の欄の金額に係る連結事業年度の分割法人若しくは現物出資法人又は事後設立法人の法人税の明細書（別表6の2(2)付表）の3の欄の金額	
	4 「当該法人の控除未済外国税額とみなされる金額④」	(1) この明細書を提出する法人を合併法人とする適格合併が行われた場合 …………… ①又は① ② (2) この明細書を提出する法人を分割承継法人若しくは被現物出資法人又は被事後設立法人とする適格分割若しくは適格現物出資又は適格事後設立が行われた場合 …………… ①又は① × $\frac{③}{②}$	
別 表 四 の 二 の 五	1 用途等	この明細書は、政令第48条の13第26項の規定の適用を受ける場合に記載し、第20号様式別表3に併せて提出してください。	
	2 「当該法人の控除未済外国税額①」	次に掲げる場合に応じ、それぞれに定める金額を記載します。 (1) 平成22年9月30日までの間に、この明細書を提出する法人を分割法人とする適格分割型分割が行われた場合 当該法人の当該適格分割型分割の日の前日の属する事業年度又は連結事業年度の第20号様式別表3の「翌期繰越額⑩」の欄の金額 (2) この明細書を提出する法人を分割法人若しくは現物出資法人又は事後設立法人とする適格分割等が行われた場合 当該法人の当該適格分割等の日の属する事業年度又は連結事業年度開始の日の前日の属する事業年度又は連結事業年度の第20号様式別表3の「翌期繰越額⑩」の欄の金額	
	3 「当該法人の国外所得金額又は個別国外所得金額②」	次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれに定める金額を記載します。	

欄 等	記 載 の し か た	留 意 事 項
	(1) 連結申告法人以外の法人 「当該法人の控除未済外国税額①」の欄の金額に係る事業年度の法人税の明細書（別表6(2)）の9の欄の金額 (2) 連結申告法人 「当該法人の控除未済外国税額①」の欄の金額に係る連結事業年度の法人税の明細書（別表6の2(2)附表）の3の欄の金額	

第20号様式別表4の3記載の手引

1 この明細書の用途等

この明細書は、指定都市（法第737条第1項の市をいいます。）内の9以上の区に事務所又は事業所（以下「事務所等」といいます。）を有する法人が当該指定都市の長に提出する第20号様式、第20号の3様式又は第22号の3様式の申告書に添付してください。

2 各欄の記載のしかた

欄	記載のしかた	留意事項
1「※区コード」		記載する必要はありません。
2「区内の主たる事務所等所在地」	区内に所在する事務所等又は寮等ごとに記載し、同一区内に2以上の事務所等又は寮等を有する場合は、主たる事務所等又は寮等を記載します。	
3「月数」	「月数」の欄は、法人税額の課税標準の算定期間又は連結法人税額の課税標準の算定期間（以下「算定期間」といいます。）中に事務所等を有していた月数を記載します。この場合の月数は暦に従って計算し、1月に満たないときは1月とし、1月に満たない端数を生じたときは切り捨ててください。	
4「従業者数」	算定期間の末日現在における当該区内の事務所等又は寮等の従業者の数を記載します。なお、新設又は廃止された事務所等にあっても、算定期間の末日現在における従業者の数を記載します。	

第20号の2様式記載の手引

1 この申告書の用途等

- (1) この申告書は、退職年金等積立金に係る法人税額を課税標準として算定した法人税割額の確定申告をする場合又はこれに係る修正申告をする場合に使用します。
- (2) この申告書は、事務所又は事業所（以下「事務所等」といいます。）所在地の市町村長に1通を提出してください。

2 各欄の記載のしかた

欄	記載のしかた	留意事項
1 「※処理事項」		記載する必要はありません。
2 金額の単位区分（けた）のある欄	単位区分に従って正確に記載してください。	
3 「所在地」	本店の所在地を記載してください。なお、2以上の市町村に事務所等を有する法人が、当該市町村内に支店等のみを有する場合は、主たる支店等の所在地も併記してください。	
4 「事業種目」	「事業種目」の欄は、事業の種類を具体的に記載します。なお、2以上の事業を行う場合にはそれぞれの事業を記載し、主たる事業に○印を付してください。	
5 「期末現在の資本金の額又は出資金の額」及び「期末現在の資本金等の額又は連結個別資本金等の額」	期末現在における資本金の額又は出資金の額、法人税法第2条第16号に規定する資本金等の額又は同条第17号の2に規定する連結個別資本金等の額（保険業法に規定する相互会社にあつては、純資産額）をそれぞれの欄に記載します。	
6 「市町村民税 申告書」	空欄には、退職年金等積立金に係る法人税の確定申告書に係る申告の場合は「確定」、これに係る修正申告の場合は「修正確定」と記載します。	
7 「課税標準となる退職年金等積立金に係る法人税額及びその法人税割額①」	(1) 「課税標準」の欄は、法人税の申告書（別表19）の12の欄の金額を記載します。この場合において、1,000円未満の端数があるときは、その端数金額又はその全額を切り捨ててください。 (2) 「税額」の欄は、一の市町村にのみ事務所等を有する法人が記載し、2以上の市町村に事務所等を有する法人は記載する必要はありません。	税額の計算を行う場合の税率は、各市町村ごとに定められた税率によってください。
8 「2以上の市町村に事務所又は事業所を有する法人における課税標準となる退職年金等積立金に係る法人税額及び法人税割額②」	(1) 2以上の市町村に事務所等を有する法人のみが記載し、一の市町村にのみ事務所等を有する法人は記載する必要はありません。 (2) 「課税標準」の欄は、次のように記載します。 (イ) ①の欄の金額を⑤の欄の数値で除して得た額（この数値に小数点以下の数値があるときは、小数点以下の数値のうち⑤の欄の数値のけた数に1を加えた数に相当する数以下の部分の数値を切り捨てた数値）に⑥の欄の数値を乗じて得た額を記載します。 ただし、主たる事務所等所在地の市町村長に提出するときは、第22号の2様式の「分割課税標準額」の欄の当該市町村分の金額を記載します。 (ロ) この金額に1,000円未満の端数があるとき、又はその全額が1,000円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨ててください。	(1) 税額の計算を行う場合の税率は、各市町村ごとに定められた税率によってください。 (2) 「課税標準」の欄の金額は、第22号の2様式の「分割課税標準額」の欄の当該市町村分の金額を一致します。
9 「①又は②のうち既に納付の確定した当期分の法人税割額③」	既に納付の確定した当期分の法人税割額のうち退職年金等積立金に対する法人税額に係る法人税割額に相当する金額を記載します。 ただし、当該事業年度において、第20号の3様式を提出した法人については、第20号の3様式の④の欄の金額を限度とします。	
10 「この申告により納付すべき法人税割額④」	この金額に100円未満の端数があるとき、又はその全額が100円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨ててください。	

欄	記載のしかた	留意事項
11「全従業者数⑤」、「当該市町村内に所在する事務所又は事業所の従業者数⑥」及び「⑥の内訳⑦」	<p>2以上の市町村に事務所等を有する法人が従たる事務所等所在地の市町村長に提出する場合に記載します。</p> <p>この場合における従業者数とは、法人税額の課税標準の算定期間（以下「算定期間」といいます。）の末日現在における従業者の数をいいます。ただし、次の(1)から(3)までに掲げる事務所等にあつては、それぞれ(1)から(3)に定める従業者の数（その数に1人に満たない端数を生じたときは、これを1人とします。）をいいます。</p> <p>(1) 算定期間の中で新設された事務所等 $\text{算定期間の末日現在の従業者数} \times \frac{\text{新設された日から算定期間の末日までの月数}}{\text{算定期間の月数}}$</p> <p>(2) 算定期間の中で廃止された事務所等 $\text{廃止された月の前月末現在の従業者数} \times \frac{\text{廃止された日までの月数}}{\text{算定期間の月数}}$</p> <p>(3) 算定期間の各月の末日現在の従業者数のうち最も多い数が最も少ない数の2倍を超える事務所等 $\frac{\text{算定期間の各月の末日現在の従業者数を合計した数}}{\text{算定期間の月数}}$</p> <p>なお、月数の計算は、暦に従って計算し、1月に満たない端数を生じたときは、切り上げてください。</p>	主たる事務所等所在地の市町村長に提出する場合は、記載する必要はありません。

第20号の3様式記載の手引

1 この申告書の用途等

- (1) この申告書は、前事業年度又は前連結事業年度の法人税割額を基礎にして中間申告をする場合に使用します。
 (2) この申告書は、事務所又は事業所（以下「事務所等」といいます。）所在地の市町村長に1通を提出してください。

2 各欄の記載のしかた

欄	記載のしかた	留意事項
1 「※処理事項」		記載する必要はありません。
2 金額の単位区分（けた）のある欄	単位区分に従って正確に記載してください。	
3 「法人名」	法人課税信託の受託者が当該法人課税信託について、この申告書を提出する場合には、当該法人課税信託の名称を併記してください。	
4 「所在地」	本店の所在地を記載してください。なお、2以上の市町村に事務所等を有する法人が、当該市町村内に支店等のみを有する場合には、主たる支店等の所在地も併記してください。	
5 「事業種目」	事業の種類を具体的に、例えば「電気器具製造業」と記載します。なお、2以上の事業を行う場合にはそれぞれの事業を記載し、主たる事業に○印を付してください。	
6 「前期末現在の資本金の額又は出資金の額」及び「前期末現在の資本金等の額又は連結個別資本金等の額」	前事業年度又は前連結事業年度末日現在の資本金の額又は出資金の額、法人税法第2条第16号に規定する資本金等の額又は同条第17号の2に規定する連結個別資本金等の額（保険業法に規定する相互会社にあつては、純資産額）をそれぞれの欄に記載します。なお、「前期末現在の資本金の額又は出資金の額」の（ ）内には、当該事業年度又は当該連結事業年度開始の日から6月を経過した日の前日現在の資本金の額又は出資金の額を記載します。	
7 「予定申告税額②」及び「この申告により納付すべき法人税割額④」	この金額に100円未満の端数があるとき又はその全額が100円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨ててください。	
8 「算定期間中において事務所等を有していた月数⑤」	この月数は暦に従って計算し、1月に満たないときは1月とし、1月に満たない端数を生じたときは切り捨ててください。	算定期間中に事務所等又は寮等の新設又は廃止があつた場合は、その月数には新設又は廃止の日を含みません。
9 「円× $\frac{⑤}{12}$ ⑥」	(1) この金額に100円未満の端数があるときは、その端数金額は切り捨ててください。 (2) 指定都市に申告する場合は、「指定都市に申告する場合の⑥の計算」の欄の合計額又は第20号様式別表4の3の「計」欄の金額を記載します。	
10 「当該市町村分の均等割の税率適用区分に用いる従業者数」	当該事業年度又は当該連結事業年度開始の日から6月を経過した日の前日現在における事務所等又は寮等の従業者の数を記載します。なお、新設又は廃止された事務所等にあつても、その算定期間の末日現在における従業者の数を記載します。	
11 「前事業年度の法人税割額の明細」（⑨から⑯までの欄）	(1) これらの欄は、それぞれの欄に対応する前事業年度又は前連結事業年度の確定申告書に記載した金額を記載します。 (2) ⑯の欄は、⑨の欄のかっこ内の金額に前事業年度又は前連結事業年度の法人税割の税率を乗じて得た金額を記載します。	2以上の市町村に事務所等を有する法人の⑯の欄は、⑩の欄の金額に⑨の欄のかっこ外の金額に対する同欄のかっこ内の金額の割合を乗じて得た金額を記載します。
12 「法第15条の4の徴収猶予を受けようとする税額」	2以上の市町村に事務所等を有する法人が修正申告に係る税額につき徴収猶予を受けようとする場合において第1号様式による届出書に代えようとするものが記載してください。この場合において記載する金額は、④の欄に記載した金額と同額になります。	

欄	記載のしかた	留意事項
13「指定都市に申告する場合の⑥の計算」	<p>指定都市に申告する場合にのみ、次により記載します。</p> <p>(1) 事務所等又は寮等の所在する区ごとに記載します。</p> <p>(2) 「※区コード」の欄は記載する必要はありません。</p> <p>(3) 「従業者数」の欄は、法人税額の課税標準の算定期間又は連結法人税額の課税標準の算定期間の末日現在における事務所等又は寮等の従業者数を記載します。なお、新設又は廃止された事務所等にあっても、その算定期間の末日現在における従業者数を記載します。</p>	<p>11以上の区に事務所等又は寮等を有する場合は、この欄には記載せず第20号様式別表4の3を添付してください。</p>

第22号の2様式記載の手引

1 この明細書の用途等

この明細書は、2以上の市町村に事務所若しくは事業所（以下「事務所等」といいます。）を有する法人が、主たる事務所等所在地の市町村長に第20号様式又は第20号の2様式の申告書を提出する場合に、その申告書に添付して1通を提出してください。

2 各欄の記載のしかた

欄	記載のしかた	留意事項
1 「法人税法の規定によって計算した法人税額①」	<p>第20号様式の申告書に添付する場合は、次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれに定める法人税の申告書の欄の金額を記載します。</p> <p>(1) 別表1(1)を提出する法人 別表1(1)の10の欄の金額（ただし、この①の欄の上段の（ ）内に記載された金額がある場合には、当該金額を加算した合計額を記載します。以下(2)及び(3)においても同じです。）</p> <p>(2) 別表1(2)を提出する法人 別表1(2)の8の欄の金額</p> <p>(3) 別表1(3)を提出する法人 別表1(3)の8の欄の金額</p> <p>なお、（ ）内には、使途秘匿金の支出の額の40%相当額（別表1(1)の10の欄の上段に外書として記載された金額、別表1(2)の8の欄の上段に外書として記載された金額又は別表1(3)の8の欄の上段に外書として記載された金額）、リース特別控除取戻税額（別表1(1)の5の欄、別表1(2)の5の欄又は別表1(3)の5の欄の金額）及び土地譲渡利益金額に対する法人税額（別表1(1)の7の欄、別表1(2)の7の欄又は別表1(3)の7の欄の金額）の合計額を記載します。</p>	<p>連結法人及び連結法人であった法人は、記載しないでください。</p>
2 「試験研究費の額に係る法人税額の特別控除額②」	<p>第20号様式の申告書に添付する場合は、次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれに定める金額を記載します。</p> <p>(1) 租税特別措置法第42条の4第1項（試験研究費の総額に係る税額控除）、第2項（特別試験研究費に係る税額控除）及び第3項（繰越税額控除限度超過額に係る税額控除）の規定の適用を受ける法人 法人税の明細書（別表6(6)）の27の欄の金額</p> <p>(2) 租税特別措置法第42条の4第6項（中小企業者等の試験研究費に係る税額控除）又は第7項（繰越中小企業者等税額控除限度超過額に係る税額控除）の規定の適用を受ける法人 零</p> <p>(3) 租税特別措置法第42条の4第9項（試験研究費の増加額等に係る法人税額の特別控除）の規定の適用を受ける法人（中小企業者等を除きます。） 法人税の明細書（別表6(8)）の19の欄の金額</p>	<p>連結法人及び連結法人であった法人は、記載しないでください。</p>
3 「国際戦略総合特別区域及び雇用の数の増加に係る法人税額の特別控除額③」	<p>第20号様式の申告書に添付する場合は、次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれに定める金額を記載します。</p> <p>(1) 租税特別措置法第42条の11第2項（国際戦略総合特別区域において機械等を取得した場合の法人税額の特別控除）及び第3項（繰越税額控除限度超過額に係る法人税額の特別控除）の規定の適用を受ける法人 法人税の明細書（別表6(25)）の24の欄の金額</p> <p>(2) 租税特別措置法第42条の12第1項（雇用の数が増加した場合の法人税額の特別控除）の規定の適用を受ける法人（中小企業者等を除きます。） 法人税の明細書（別表6(26)）の12の欄の金額</p>	<p>連結法人及び連結法人であった法人は、記載しないでください。</p>
4 「還付法人税額等の控除額④」	<p>第20号様式の申告書に添付する場合に、第20号様式別表2の3の⑤の計欄の金額を記載します。</p>	<p>連結法人及び連結法人であった法人は、記載しないでください。</p>
5 「退職年金等積立金に係る法人税額⑤」	<p>第20号様式又は第20号の2様式の申告書に添付する場合に、法人税の申告書（別表19）の12の欄の金額を記載します。</p>	<p>連結法人及び連結法人であった法人は、記載しないでください。</p>

欄 等	記 載 の し か た	留 意 事 項
6「差引計⑥」	<p>次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれに定める金額を記載します。この場合において、1,000円未満の端数があるとき、又はその全額が1,000円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨ててください。</p> <p>(1) 第20号様式の申告書を提出する法人</p> <p>(イ) 連結法人及び連結法人であった法人以外の法人 ①+②+③-④+⑤の金額</p> <p>(ロ) 連結法人及び連結法人であった法人 第20号様式別表1の⑧の欄の金額</p> <p>(2) 第20号の2様式の申告書を提出する法人 ⑤の欄の金額</p>	
7「事務所又は事業所」	同一市町村内に所在する事務所等ごとに記載します。	
8「分割基準及び分割課税標準額」	<p>(1) 「従業者数」の欄は、同一市町村内に所在する事務所等ごとに記載し、同一市町村ごとに小計を付してください。</p> <p>この場合における従業者数とは、法人税額の課税標準の算定期間又は連結法人税額の課税標準の算定期間（以下「算定期間」といいます。）の末日現在における従業者の数をいいます。ただし、次の(イ)から(ロ)までに掲げる事務所等にあつては、それぞれ(イ)から(ロ)に定める従業者の数（その数に1人に満たない端数を生じたときは、これを1人とします。）をいいます。</p> <p>(イ) 算定期間の中で新設された事務所等 算定期間の末日現在の従業者数× <u>新設された日から算定期間の末日までの月数</u> 算定期間の月数</p> <p>(ロ) 算定期間の中で廃止された事務所等 廃止された月の前月末現在の従業者数× <u>廃止された日までの月数</u> 算定期間の月数</p> <p>(ハ) 算定期間の各月の末日現在の従業者数のうち最も多い数が最も少ない数の2倍を超える事務所等 <u>算定期間の各月の末日現在の従業者数を合計した数</u> 算定期間の月数</p> <p>なお、月数の計算は、暦に従って計算し、1月に満たない端数を生じたときは、切り上げてください。</p> <p>(2) 「分割課税標準額」の欄は、次のように記載します。</p> <p>(イ) ⑥の欄の金額を「合計」の欄の従業者の数で除して1人当たりの分割課税標準額を算出し、当該1人当たりの分割課税標準額に「従業者数」の欄の市町村ごとの小計の数値を乗じて得た額を記載します。なお、従業者1人当たりの分割課税標準額を算出する場合において、当該除して得た数値に小数点以下の数値があるときは、当該小数点以下の数値のうち当該従業者数のけた数に1を加えた数に相当する数の位以下の部分の数値を切り捨ててください。</p> <p>(ロ) この金額に1,000円未満の端数があるとき、又はその全額が1,000円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨ててください。</p>	

第22号の3様式記載の手引

1 この申告書の用途等

(1) この申告書は、市町村内に事務所又は事業所（以下「事務所等」といいます。）を有する公共法人（法人税法第2条第5号の公共法人）及び公益法人等（法人税法第2条第6号の公益法人等並びに防災街区整備事業組合、管理組合法人及び団地管理組合法人、マンション建替組合、地方自治法第260条の2第7項に規定する認可地縁団体、政党交付金の交付を受ける政党等に対する法律第7条の2第1項に規定する法人である政党等並びに特定非営利活動促進法第2条第2項に規定する特定非営利活動法人を含む。）で法人税を課されないもの（法第296条の規定によって非課税となるものを除きます。）が市町村民税の均等割を申告する場合に使用します。

(2) この申告書は、4月30日までに事務所等所在地の市町村長に1通を提出してください。

2 各欄の記載のしかた

欄	記載のしかた	留意事項
1 「※処理事項」		記載する必要はありません。
2 金額の単位区分（けた）のある欄	単位区分に従って正確に記載してください。	
3 「同左の月数①」	この月数は、暦によって計算し、1月に満たないときは、1月とし、1月に満たない端数を生じたときは切り捨ててください。	
4 「この申告によって納付すべき市町村民税の均等割額②」	(1) この金額に100円未満の端数があるときは、その端数金額を切り捨ててください。 (2) 指定都市に申告する場合は、「指定都市に申告する場合の②の計算」の欄の合計額又は第20号様式別表4の3の「計」欄の金額を記載します。	
5 「指定都市に申告する場合の②の計算」	指定都市に申告する場合にのみ、次により記載します。 (1) 事務所等又は寮等の所在する区ごとに記載します。 (2) 「※区コード」の欄は記載する必要はありません。	10以上の区に、事務所等又は寮等を有する場合は、この欄には記載せず第20号様式別表4の3を添付してください。